

星空の向こうへ

梅谷理々加
うめがいらりか
栄東高等学校 三年

柔らかな日差しが降りそそぐ。うっかりしていると寝てしまいそうな心地良さの中、私は開け放した窓から身を乗り出した。目の前を一枚の桜の花びらが横切る。風が吹いて、次から次へと舞い落ちた。つかもつとして手を伸ばす。花びらをこごとく逃した手はただ空を掻いただけだった。

「真田」

突然ドアが開いて顧問がやってくる。そう、ここは廃部寸前、天文部の部室。

「新入生勧誘頑張れよー」

「……はい、わかりました」

笑顔をはりつけて答える。顧問はそれだけ言って、ピラを手渡して去っていった。私は星が好き。大好き。あの人は普通。それだけ。第一、星のことなんかどうでもいいよ。うな人を五人も集めて部活をやるより、一人で静かに見ていた方がよっぽどましだ。だがしかし、上の命令には逆らえない性分のため、勧誘をやらないわけにはいかない。ぼらまこうとした殺風景なピラを、窓の外からひっこめた。その時だ。大きく風が吹いて数枚のピラをさらった。そのうちの一枚が、ひらりと外へと踊り出る。そのまま宙をゆっくりと漂って、一人の男子生徒の頭の上に舞い降りた。

「天文部部員募集……？」

「ごめんねー」

私は上から声をかける。彼は数回キョロキョロとあたりを見回した後、上だと気付いたらしい。

「それ、あげるー」

「え、あ、ありがとうございます」

——これが、君と私の出会い。

ガラッ。予期もしない音がして、思わずドアの方を振り向く。入学者の約半分がスポーツの推薦で入ってくるこの学校で、廃部寸前の天文部に足を運ぶ者がいるとは。

「こんにちは」

あ、この子は……

「昨日の……」

「はい、星宮^{ほしみやまきひと}秋人です」

「あ、私は真田^{まいた}夜空^{よぞら}です」

お互いにぺこぺこ挨拶をする。私は内心、焦っていた。仮入部希望者への対策を何も考えていなかったからだ。

「えっとー……」

「あ、すみません、俺、入部希望者です」

「……ん？ あれ、聞き間違えたかな、『入部希望』って。」

「ごめん、もう一回聞いてもいい？」

「あっ、はい。俺、天文部に入部希望です」

「仮じゃなくて!？」

私は信じられずに再度確認する。

「はい。正式に」

彼はしっかりとした目で頷いた。

「えっ、だってまだ仮入部期間初日だよ!? もう決めちゃっ

ていいの？ それも、この、廃部寸前の天文部に!」

「はい。俺、星が好きなので」

彼はきつぱりと言った。私は理解が出来ない。

「……まあいいや、じゃあ」

考えるのを放棄した私が入部希望届の説明に入ろうとした時、急にスライド式のドアが激しく開いた。

「秋人おぉー!!」

そう叫びながら、高校一年生とは思えぬような、がっちり体型の男子が現れた。上履きの学年カラーを見る限り、間違いない。

「まわき」

「どうやら星宮くんの知り合いらしい。」

「バスケットはこっちじゃねーぞー」

「知ってるよ。俺、天文部に入るから」

まさきと呼ばれた彼とは対照的に、星宮くんは平然と答える。

「秋人、バスケットは!？」

「何言ってるの。やめたよ。そもそも俺は推薦でこの学校に入ったわけじゃない」

「え……、聞いてねーよ」

「言ってるなかったっけ？ ごめんね。ああそっだ、もう時間じゃない？ ほら、帰って」

呆然とする彼を尻目に、星宮くんは笑顔でそう言い放った。

次の日、部室内で図鑑を読んでいると、隣に星宮くんがきて座った。もうすっかり天文部の部員みたいだ。

「先輩、昨日は騒がしくてすみませんでした」

「うっん、大丈夫」

「秋人おぉー!!」

私が最後まで言い終わらないうちに昨日の「まなきくん」が乱入してくる。昨日と全く同じ登場の仕方です。

「……すみません、今日もです」

申し訳なさそうに星宮くんは体を縮こまらせた。

「あー、そうみたいね。いいよいよよ、私は惑星図鑑でも読んでから自由に話して」

「ありがとうございます」

へこりと頭を下げて、星宮くんはドアの方へ小走りで行った。

「秋人！ バスケ何でやめちまったんだよ!! 和也のこと

かよ!? そんなの……」

「違うよ」

あまりにも冷やかな声に驚いて顔をあげる。部屋内には。ピリピリとした空気が流れていた。え、ちょっと、大丈夫？ 不安と焦りが込み上げてくる。このままあの二人が取っ組み合いでも始めたら、私はどうしろというのだろう。ちょうど開いているページの、宇宙の漆黒が不安をさらに濃くさせた。だが、そんな心配は杞憂に終わった。

「……ごめん、あとで、ちゃんと話そう」

「お、おう……」

まなきくんはそのまま帰っていった。

「すみません」

入り口の方から戻ってくると、それだけ言って、後は考え込むように黙ってしまった。

どれくらい経っただろうか。時計の秒針の音が妙に頭の中に響き始めた時、たまらなくなつて聞いてしまった。

「ね、ねえ、星宮くん。バスケで何が」

ガタツ。隣で彼の座っていたイスが、大きな音を立てて後ろに倒れた。

「先輩には関係ないです」

先程の冷やかな声が、冷やかな視線と共に私に向けられる。突き刺すようなその視線は氷の矢を想起させた。

「っそ、そうだよね！ ……ごめん」

私はその視線から逃れるように膝にのせた指先を見つめる。

「……俺、帰ります」

「うん」

そう、指先を見つめたまま答えた。

今日は顔を合わせにくい。そうだよ、昨日のは駄目だ。私だったとしても、怒る。おまけに、私になんとか出来る話じゃないし、嫌われてしまったかもしれない。

部屋の前に来てみたはいいものの、かれこれこうして五分はドアの前に突っ立っている。

うーん……。よし、帰ろう。
くるり、と向きを変えると、

「先輩」

「わああー！」

真後ろに星宮くんが立っていた。今、一番会いたくない人だ。

「あ、すみません！ 驚かせるつもりは……」

「ごっちこそごめん。大きな声あげて」

すると星宮くんはフルフルと首を横に振って言う。

「いえ。あの、いつも謝っている気がするんですが、昨日は本当にごめんなさい。まさきとは今日、話してきました。

納得はしていなかったみたいですけど……」

「うっん、星宮くんは謝る必要ないよ。私の無神経さが引き起こした結果だから。私こそごめんなさい」

お互いに謝ってばかりだ。しばらくの間、微妙な空気が流れる。彼も、特に返す言葉はないらしい。やっぱり私が悪いよなあ。

「あ、そうだ！ 今日、野外活動しませんか？」

「野外活動？」

あまりにも落ち込んでいる私を見かねてか、彼は私を外へと連れ出した。

「四月の夜はちょっと涼しいね」

ブレザーごしに少し冷たい風を感じる。夜の空気の香りをめいっばい吸い込んだ。夜は独特な香りがする。

「そうですね。俺の上着貸しましょうか？」

星宮くんは自分のブレザーを私に差し出す。

「うっん、大丈夫。ありがとう」

「そうですね？」

「そう言って、それを鞆にしまった。

こういう時って借りておいた方が良かったのかな。

わからない。

なんだか相手の厚意を無下にしているような気がした。

「野外活動って、天体観測のこと？」

少し前を歩く背中に話しかける。

「そういうことです。さあ、第一公園に行きましょ」

言いながら、彼は私の手を引く。少しずつ、楽しいような気がしてきていた。

第一公園は普通の公園だった。ただ一つ、他と違つところは、電灯があまり機能していないことだ。そのせいか、暗くなり始めたこの時間に人は誰もいない。

「ここ、うってつけなんですよ。光がなくて、星がよく見える」

本当だ。まだ暗くなり始めたばかりなのに、ちらほらと小さな光が見受けられる。

「へえー、今度来てみようかな」

「だめですよ。女子高生が一人でこんなところに来るのは」
星宮くんは人差し指を横にチツチツと軽快に振る。

「ええー」

「俺を誘ってくださいね」

「はい」

他人ひとといふことを楽しいと感じたのはひどく久しぶり

だった。

ずっと、考えていることがあった。答えはいつまでも見つかからない。たぶん、私の中にはない。

「先輩、悩みがあるなら、俺、聞きますから。いつでも、先輩が言いたくなった時に教えてください。力になりますから」

ジャングルジムの隣に腰掛けた彼は、黙りこくっている私に声をかける。

彼は、私を見ていた。彼は、きつと目を見て話すのだろう。私は、彼を見られなかった。

「……ありがとう」

私は自分が嫌いだった。昨日だって、こんなふうに、彼のように寄り添えていたら良かったのだろう。

「はい」

私には上手な言葉と、特に、思慮しよが足りない。わかっているけど、どうにもならない。これは、甘えと努力不足だ。ずっとわかってきた。

沈黙が続いた。夜の闇は次第に深まり、星も段々とその輝きを増す。ひんやりとしたジャングルジムから冷たさが

伝わってきたころだった。

突然、一粒の雫が手の甲を濡らせた。雨だ。

雨足はすぐに強まった。すかさず近くの東屋に駆け込む。

「帰ろっか」

私は、降り続ける雨を見て言った。

「はい」

横顔を見上げる。彼は少し、悔しそうだった。

仮入部期間は無事終わり、と言っても何もしてないのだが、星宮くんの友人たちが名前だけ貸してくれることになり、天文部は廃部の危機を免れた。

「先輩、今日こそですよ！ 天体観測！」

星宮くんは部屋のドアを元気良く開け放した。良かった、元気になったようだ。あの後交互に風邪を引いてしまい、しばらく会えていなかったのだ。あの雨が原因だろう。二人とも傘を持っていなかったため、傘なしの状態で走って帰ったのだった。

「星宮くん、久しぶり」

「もう、本当にすみません。先輩に風邪引かせ」

「謝りすぎ。いいって風邪くらっ」

彼が言い終わる前に遮る。

「……………」

謝りすぎること指摘された彼は何も言えないようだった。

「あはは、心配性？」

私は奥から引つ張り出した本についている埃を払いながら問う。

「……………」

彼からの応答はない。何か考え込んでいるようだった。

「……………星宮くん？」

「……………先輩は、『謝る』って何だと思えます？」

「ごほっ。『謝る』？ 謝罪じゃない？」

自分から払った埃にむせる。散ってからちようど今、顔まで接近してきたようだった。彼の質問の真意はわからない。どの答えが正解なのかも。

「ずっと謝っていると考えてしまうんです。謝ることについて。相手が許してくれるまで必死に謝って、許してくれたら安心する。起こした問題が小さければ、謝罪の気持ちなんてその後忘れてしまう。これは、俺の自己満足なのか

もしれない、って思ったぞ」

「目」満足？」

「そうです。謝ったという事実で満足するんです。自分はちゃんと謝った、って。許しを乞っている。そこにあるのは、許されたい、っていう気持ちであって、『めんなさい』って気持ちではない。そんな気がして」

「要するに、自分の謝罪の中にある気持ちを疑っているの？」

「たぶん、そうです。自分の気持ちがわからなくなっ……」

「うーん……、そこまで気にしなくていいんじゃない？例えば、駅でちょっと人にぶつかった時に咄嗟に出てくる『めんなさい』には、気持ちなんてそんなに込もってないと思うし。ただ、謝らないのは駄目だよ。相手を不快にさせる。あ、じゃあ、『謝る』って人間関係を円滑に進めるために必要なのかな。あれ、でもそれじゃあ気持ちは二の次みたいだ」

私はうーん、と唸る。これは結構難しい問題だ。そんなことを気にしながら生きてるのか、彼は。

「難しいね。でも、やっぱり『めんなさい』は頭で考えるものじゃなくて、心が大事なんだと思う。星宮くんの望

む答えではないと思うけど、悪いことをしたなら、『めんなさい』を。その中にある自分の気持ちを信じて欲しい。

上手いアドバイスが出来なくてごめんね」

「いえ、少し心が軽くなった気がします。本当にありがとうございました」

「良かった。じゃあ、行こうか。天体観測」

「はー」

第一公園を目指して歩く。今日はこの前とは違う道を行くことにした。こちらの方が近道らしい。見たことのない店が建ち並び、向こうには最近日本に上陸したというクレール屋があった。

「ねえ、あれ、最近出来た……星宮くん？」

決して星宮くんが最近出来たわけではない。異変を感じ取っただけだ。彼はただ一点を見つめていた。

「ちょっと」

「はっ！ すいません、なんでしたっけ？」

「バスケットボール？」

彼が見ていたものだ。私は彼の質問を無視して質問を返す。空き地にゴールだけが置いてあった。「コートはない。」

「え？ あっ！ あれは、なんでもないです！ 行きましょ
う、先輩」

彼の顔を盗み見た。私は、君の目があそこから離れなかつたことを知っている。

「やるうよ、バスケ。ボールあるかなー」

私は彼を強引に引っ張っていく。

「いや、俺は……っ」

「やだなあ、私がやりたいの。付き合っつてよ」

「え……、はい」

彼は同意せざるを得なかった。

ガコッ。バコッ。

おかしいなあ。さっきからずっとリングに当たっていた。

ボールはなかなかネットを通ってくれない。

「……先輩、下手すぎません？」

笑うとかを通り過ぎて、もはや真顔で聞いてくる。

「運動音痴なんだよ。見本見せてよ」

「……しょうがないですね」

パシユッ。

綺麗なフォームでゴールが決まった。彼が相当バスケが

上手なのは素人目にも明らかだった。

「秋人……？」

上手いなあ、と言おうとしたところだった。星宮くんと
同じ年くらいの見た目の男子が現れる。その男子は他校の
制服に身を包んでいた。この辺では一番エリートとして知

られる学校だ。

「……和也」

どうやらお互いに知り合いだったようだ。私は声がギリ
ギリ聞こえる、近くのベンチに腰掛けた。ここは私の出る
幕ではない。

「うおっ、やっぱりか！ 元気にしてたか!？」

和也という少年はだいたいテンションが高い。いつかの『ま
さき』という人物とも重なった。彼は自分よりも二倍ほど

元気な少年を近くに置くのが好きなのだろうか。星宮くん
とその少年のやりとりを眺めながら、ふとそんな疑問がよ

ぎる。

「おっや」

「嘘つけ」

少年は星宮くんの目をしっかりと見据えていた。

「は？」

「まさきたちから全部聞いてんの。今秋人たちの学校に行こうとしてたっけ」

「……………」

星宮くんは微妙な顔をしていた。表情から感情は読み取れない。

「ま、とりあえず、1 on 1 やろうぜ」

その少年はやや張りつめた空気とは対照的にあっけらかんとした声で提案する。

「は？ 和也、足……………」

「大丈夫、大丈夫！ 少しくらい！ その子ー！ ジャンプボール投げてくれない？」

「和也、その人先輩。それに俺はまだ」

「あれ？ そうなの？ じゃあ先輩！ よろしくお願ひしませーす！」

「……………はあ」

話を聞かない友人に、さすがの彼も諦めたらしかった。

はあっ。はあっ。

「スッキリしただろ？」

「……………うん」

「気持ちいいだろ？」

「……………うん」

少年は空を仰いだ。夕日が空を、街を、朱く染めていた。

「バスケ、やめんなよ」

「…………それは、出来ない」

少年は、彼を見つめる。彼は、少年の目から逃れるように答えた。いつかの私たちのようだった。

「なんでだよ」

それでも少年は追及をやめない。

「俺にはそんな資格」

「ぶっっげけんなよ！ 資格があるとかないとか！ ーということ聞いてんじやねーよ！ お前がバスケやりたいかやりたくないかっー話！」

少年は一気にまくしたてたおかげで、息切れしているようだった。この場で誰が一番腰を抜かしたかといえば、それは私だ。ちょうど飲んでいた水をぶちまけ、ペットボトルの蓋を後ろの茂みに投げ飛ばしてしまった。男性の怒鳴り声はどうも心臓に悪い。

「俺は……………っやりたくなっ」

「本当か？ さっきあんなに楽しそうな顔してたのに？」

秋人はバスケットしてるときが一番輝いてる。俺は、知ってる」

「……」

「頼むよ……」

少年は彼の肩をつかんだ。あまりにも悲痛な声だった。

「秋人が、俺の足の怪我のことで負い目を感じてることはわかってる。でも、そんなのもう昔のことだし、スポーツに怪我は付きものだ」

「……でも、俺はわざと試合中に足を引っかけたんだ。簡単に許されるようなことじゃ」

「知ってたよ」

「え？」

「秋人がわざとやったこと。その頃は俺も調子乗ってたし、仕方なかったかな、ってさ。すごいイラついたけど。だってこれからバスケットは出来ないって言われて、夢が奪われて。でも、今はもう怒ってない」

そんなことがあったのか。頑なにバスケットを避けていたのはこれが原因なのだろう。友達に夢を奪われた少年と、友達達の夢を奪ってしまった彼。最初に押し量られるのは少年の心だろうけど、自分のした過ちに気付き、苦しみ続ける彼の心中も無視出来ない。

「ごめん」

「だから、本当に悪いって思ってるのなら、違う方法で償って」

「……………わかった」

彼は少年を見つめた。決心がついたのかもかもしれない。

「才能があるのに、無駄にすんな。諦めんな。夢を奪った責任として俺の分まで果たせ。俺からの頼みごと。な？」

少年の言葉に彼は、はっとしていた。

「そっか……。俺、やるべきことを見失ってた。ごめん和也。それと、ありがと。俺、バスケット続けるよ。きっと夢を、

二人の夢を叶えてみせる」

「よしっ！ 頑張れよ！ 期待してる」

「うん」

少年が彼を許したとして、彼は自分を許せるだろうか。戻れない過去の自分を永遠に呪って、消えない傷を抱えていくのだろうか。あるいは、自分は加害者だから、被害者の方が苦しい、と自分を責め続けるのかもしれない。知らない間に、一筋の雫が頬を伝った。

「それでまさきがさー、あ、先輩のこと忘れてた！」

「おおっ、そうだった！ あの先輩なんていう名前？」

「夜空先輩」

二人の少年が走ってくる。どちらも清々しい顔をしている。私は、夕日に照らされて強調される髯を隠すように、蓋のないペットボトルを、勢いよく顔に向けてさかさまにした。

「ええっ!? 先輩!?!」

まだ夏が程遠い夕方に、常温の水で冷えた頭には『ごめんなさい』の話がよぎった。

「ほんっとすんません!!」

「いや、いいよ。廃部は免れられないし、初めからこうなる予定だったのが君たちのおかげで延びただけだから、ありがと」

名前だけ貸してくれていた、まさきくん他数名の兼部がバスケット部のキャプテンにばれて、今すぐやめてほしいと言われたらしい。さすが、本気で全国を狙う部活は違う。

「せんばああい」

彼らは大げさだ。

「それと、星宮くんはバスケットに」

「えっ」

天文部は解散だしね、と付け加えた。彼がここに留まる理由はない。

「すみま、いや、ありがとっぺいします」

「うん」

星宮くんの後ろでまさきくんたちが驚いているのが見えた。そうか、彼らはまだ知らないのかも知れない。星宮くんがバスケットを続ける決意をしたことを。

「先輩、いつか絶対天体観測行きましようね」

「そっだね。結局一回も出来てないからね」

「はい。じゃあ、行ってきます……」

彼は噛みしめるように言う。たぶんもう戻らないであろう部室を見て。

「頑張っつ」

部活に行く彼らを見送る。誰もいない部室に目をやり、私はため息をついた。

撤退かなあ、現状維持かなあ。やることのない私は意味も無く部室内をぶらつく。ふと、教室に忘れ物をしていたことに気付いた。大変だ。面倒なことに明日提出の課題である。急ぐ必要もそんなにないので、歩いて教室に向かう。

校庭から運動部のかけ声が聞こえた。青空に、野球ボールの力キーンという音が吸い込まれていく様を想像する。実際はもう夕方だった。空は青くない。

おっと危ない、教室を通り過ぎるところだった。近づくと教室の中から声が聞こえて、私はドアに手をかけたまま立ち止まった。

「夜空ちゃんってちょっとつまないよね」

「あー、わかる」

「なんか八方美人ていうか」

「うんうん」

「人に嫌われるのが怖いんじゃない?」

「わかるけどね」

「行き過ぎていうか」

教室内の足音が近づいてくる。まずい。このままだと鉢合わせしてしまう。私はとっさに近くの角を曲がって逃げようとした。

「ねえ」

「ぎゃあー」

曲がったところに人がいて、すっとんきような声をあげてしまった。そこには同じクラスの剛力欄（こうりき かん）がいた。

「剛力さん!？」

「欄って呼んでよ。苗字嫌いなんだ」

「えっと、欄ちゃん? もしかして今の聞いてた……?」

「どうだろう。良く聞かえなかったけど、あなたの悪口だったことはわかった」

欄ちゃんは教室に向かおうとしたら、ドアの前で棒立ちになっている私と教室の中の声に気付き、ここに隠れていたらしい。

「悪口っていうか……。でも、うん、まあそうかも。悪気はないと思うけど。私の話題が出て、一人がぼろりみたいなそれにみんなが同調してって感じで」

「甘くない? あの人たち、友達でしょ?」

「……そうだけど。形だけだから」

「ふーん」

欄ちゃんは興味なさげに言った。まあ、いざいざに巻き込まれるのは誰だって嫌だよなあ。私だって。面倒事にならないように今まで頑張ってきたつもりだけど。

「みんなにいい顔するのってさー、疲れない?」

「うん、まあ……。でも、嫌われたくないから」

私は苦笑いをする。顔の筋肉がひきつっていた。いつも

やっているけど、一向に上手くならない。欄ちゃんはため息をついた。

「はあ、くだらない。あなた、自分がないよ」

……そうかもしれない。

「そんな生き方、楽しくないと思うけどね。そのうち破滅するよ。変わるなら自分から。人は変わるから、勇気さえあれば。良い意味でも悪い意味でもね。ま、あたしには関係ないけど」

「ま、待って！ 欄ちゃんは昔と変わったの？」

去ろうとしていた欄ちゃんを呼び止める。彼女は振り返って言った。

「……変わったよ。人は変わるから」

それだけ言って、また歩いて行ってしまふ。飄々としている彼女は、かっこよく見えた。

「昔はあんたみたいだったよ。自分に誇りを、ね」

一人廊下に行く彼女が、そう呟いた声がつつすらと聞こえた。

そういえば、忘れ物をまだ取ってきていない。私は再び教室へと向かう。

「自分に誇りを、か」

彼女の言葉を呟いてみる。今の私には程遠い言葉だった。実体験を踏まえた彼女の言葉は心にずしりと重くのしかかった。

くだらない、か。

私もそう思うなあ。今の私は自分を否定するのが一番得意かもしれない。押し殺した「私」はごごへいった。

「あれ？ 夜空先輩？」

「……星宮くん？」

「あ、やっぱり！」

目の前にはバスケ部に向かったはずの星宮くんがいた。

彼はまだ制服を着ていた。

「あれ……？ 制服？」

「ああ、これですか？ 体操着教室に忘れちゃって。先輩

こそどうしたんですか？」

彼は決まり悪そうに笑う。

「……………」

「何か悩みですか？」

急に真剣な顔になって聞いてきた。

「うん。部活、行って」

駄目だ、彼に甘えては。これは私の問題で、彼には関係ない。部活に行かせなければ。

「嘘つかないでください。今度は俺が先輩を助ける番です」
結局、私をまっすぐ見つめてくる瞳に負けてしまった。

「……えっと、自分ってなんだろう。誰にでもいい顔しちゃう『私』は嫌いだけど、そうじゃない『私』って、私知らない。欲望のままに生きてたら、たぶん今よりもっと嫌われちゃう。けど、今もたいして人に好かれてないし」

話がまとまらない。たぶんこれじゃ伝わらない。

星宮くんは黙って聞いていた。真剣に受け止めてくれた。いた。

「あー、なんだろ、結局私ね、自分、嫌いなんだ」

「先輩は今の自分を変えたいですか？」

「……うん」

彼はゆっくりと喋り出す。

「俺の見る限り、先輩には先輩っぽさがありますし、きっと先輩の言う『私』っていうのは、先輩の中にあります。それを信じて、クラスの前でも自分らしく振る舞って見たらどうですか？」

「うーん、どうも長く付き合う人達って思うと、猫被っ

ちゃって。上手くやんなきゃクラスで一年中孤立だ、みたいな」

「じゃあ、必要なのは一握りの勇気ですね。嫌われるのどんと来い！ って思いでさらけ出せば、きっと本当の自分と出会う上に、心からの友達が出来ますよ！ 一歩踏み出す勇気ですよ！ 俺がやったみたいな」

彼は親指を立ててにかっとな笑う。けど次の瞬間、彼の顔は曇った。

「でも、こんなの無責任ですよ。俺は学年が違うし、男ですから、先輩の理解者が現れなかった時に助けることも出来ない」

「そ、そんなことないよー！」

□ではそうは言うものの、私の心は真逆だ。

確かになあ。孤立は今まで恐れてきたことであって、そうなるのを避けたいがために今みたいになっちゃってるんだし。

「大丈夫だよ」

突然、聞いたことのある声が聞こえた。

「……あなたは？」

星宮くんは驚いて尋ねる。

「剛力欄」

「欄ちゃん……」

そこには欄ちゃんが立っていた。戻って来たのだろうか。そつえば教室に用があったから私と会ったのだった。

「大丈夫って？」

彼は彼女の言葉の意味を問った。

「私、真田夜空の未来の友達」

「……えっ？」

驚いたのは私だ。なんだって？

「嫌？」

「つうん、……嬉しい。優しいね」

「そんなじゃないよ。同情に見える？」

「み、見えないよー」

「あはは。あんた、変わるんでしょ」

「つん。はっ！ 同情に見えるー！」

欄ちゃんの真意に気付き、さっきの八方美人発言を取り消す。

「それが自分の意見？」

「そっー！」

「へー、おもしろい」

欄ちゃんは挑戦的な目で私を見てきた。

「欄ちゃんには何でも言っちゃうよ！ ……いい？」

自信がなくなって付け足した。私が変わるのにはまだまだ先が長いな、と感じる。

「いいよ」

「……ありがとう」

彼女の髪が夕焼け色に染まる。そのまま風にさらわれて、さらさらと美しくなびいた。外を見れば、ほら、夕空にポールが吸い込まれた。

「夜空先輩！」

「何？」

星宮くんはいつかの時みたいに勢いよくドアを開け放つ。

ただ、そのドアはもう、かつてのような部室のドアではない。

「先輩の教室初めてですー！」

そつ、今はみんな部活に行つてて、教室には毎日私以外誰もいない。そう、彼も部活のはずだが。

「部活は？」

「これからです。その前に聞きたいことがあつて」

「何？」

開いた窓からドアに風が通り抜ける。生温い風が頬をなでた。

「もうすぐ夏休みですね」

「そうだね。最近なんだか蒸し暑い。それでどうしたの？」

私は、はぐらかすように話す彼を催促する。

「えっと……、夏休み、一緒に遊園地行きませんか」

都会を離れた山奥に、星が綺麗なことで有名な遊園地がある。そんな話に乗って、今日は二人で遊園地に来ていた。

「いいんですか？ こんな夏休みの最終週に……。先輩勉強とか忙しいんじゃない？」

「何言ってるの。星宮くんが誘ってきたんでしょ」

ふざけた芝居をしてくる後輩を一蹴する。

「あは、そうでした」

そう言っただけはパタパタと駆けていく。

「先輩！ 見てください！ 空一面に星が!!」

彼が指差す先には夜空一面に星がぎっしりとつまっていた。

「わあ！ さすが星空パーク！ 感動……」

今にも溢れて零れ落ちそうな星々に息を呑む。最初遊園地と聞いた時は何事かと思ったが、彼はこれを見せたかったのか。

「夜空先輩、知ってました？ ここ、星空パークっていいですよ」

「……？ 私今そう言ったよね？」

この後輩は、ふざけた芝居の後にはわけのわからないことを言ってくる。

「星・空・パークですよ」

「？」

私はまだ、彼の言わんとすることがわからない。

「星宮秋人と、真田夜空。俺たちみたいですね」

「本当……、んんっ、恥ずかしいこと言わないですよ、ロマンチスト」

隣の彼を肘で小突く。

「えー、先輩も賛同しかけてたじゃないですか。それに、先輩もロマンチストですよ」

そんな私に彼はいたずらっぽく笑って言った。

「はっ？」

「星が好きな人は大体ロマンチストですよ」

「何それ」

ふふ。

実は、こんなやりとりが出来るのが楽しくてしょうがない。私は空を見上げた。何万年も前の光を見ている。私たちが見ているのは過去の光だ。ベテルギウスはもう、爆発してしまっただろうか。

「あ！ 先輩！ アンタレスですー」

星宮くんが空の一点を指差す。

「わぁ、きれい！ あの赤さが目立つね」

「オリオン座は空の反対側に逃げてますね」

「あ、神話？ そうだね」

ふと、美しい透明な観覧車が目に入る。

「あ！ あれ乗ろう。天体観測観覧車。おもしろそう」

「へー！ 車体の上が透明なんですね！」

観覧車に近づいていくと、思ったよりも大きかった。そして、

「って先輩！ これ、イス以外全部透明じゃないですか!!」

結構不安を煽る乗り物であることが判明した。そのせい

か、近くまで来て、残念そうに引き返していく人々がたくさんいる。

「あれ、高所恐怖症？」

乗れないかもしれない。私は心配して尋ねる。

「いえ、高いところ好きなので、大丈夫です」

私たちは乗ることが出来そうだ。

「すごいきれい！ 星空の中にいるみたい……」

「本当です……!」

透明な車体が、乗客を星空の中に座っているような気持ちにさせる。なんて素敵で乗り物なんだろう。徐々についていって近づいていく。もっと星に近づいていくようだった。

「先輩——」

「私も」

私たちは空を見上げる。夜空にきらめく星々が私たちを包み込む。星空の向こうには何があるだろうか。星宮秋人と真田夜空のこれから先には何が待っているだろうか。彼の夢は叶うだろうか。私は変わるだろうか。いや、変わ

るんだ。だから、進め。
進め、星空の向こうへ。